

# 過去5年間の外来処方せんよりみた 月別調剤業務量

福家 秀敏, 古城 郁子\*, 丹野 裕子\*\*  
秋山 恭平, 伊藤 立志

剤室勤務者は12名(うち薬剤師11名)である。

## はじめに

近年, 当院において外来処方せん枚数の減少傾向がみられる。著者らは調剤業務管理として, 調剤業務量を過去63ヶ月間のデータにもとづき, 12ヶ月移動平均値, 対傾向値比率法による月別変動値の統計学的解析を行なったので報告する。なお, 当院は現在, ベット数497床(うち伝染病棟50床), 診療科14科, 薬剤員数21名である。また調

## 調査方法

処方せんにおける各数値の算定方法は次のように行なった。1枚の処方せんに記載されている処方方の数を処方件数1件とし, これに投薬日数を乗じた値を剤数とした。また外用剤は処方せん中での最小包装単位を1剤とした。

1980年7月から1985年9月までの63ヶ月間

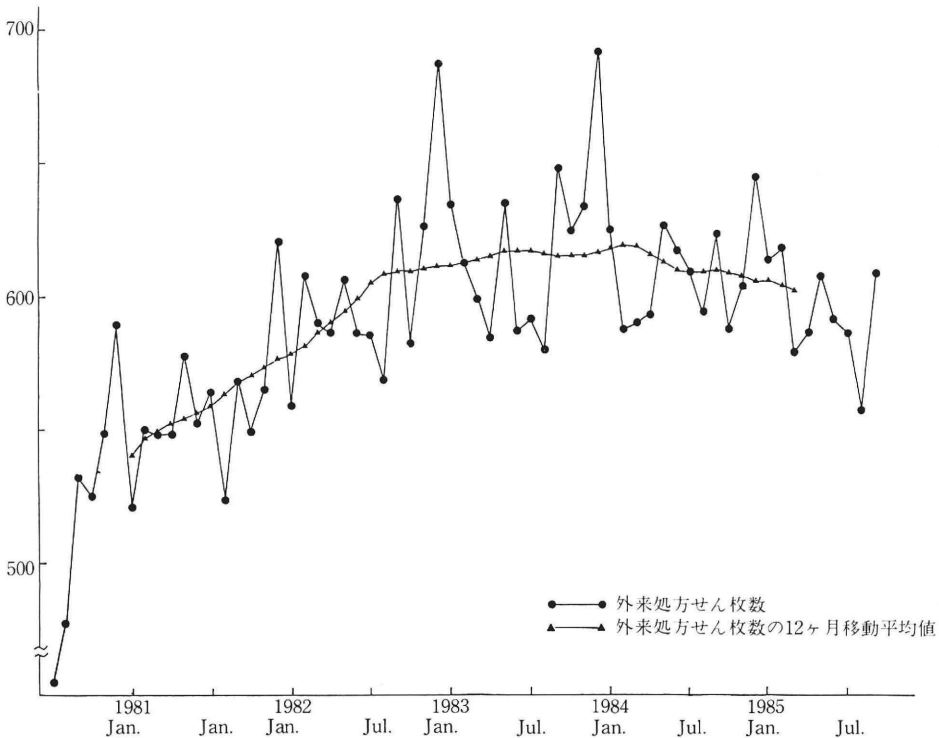


図1. 1日平均外来処方せん枚数と12ヶ月移動平均値

\* 泉中央病院薬局  
\*\* ミナミ調剤薬局

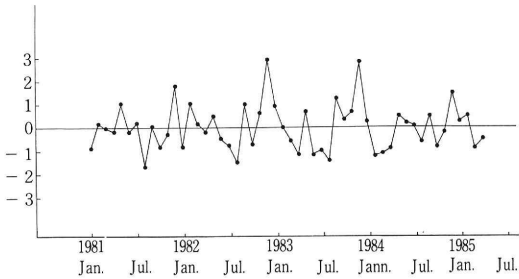


図2. 1日平均外来処方せん枚数の循環変動

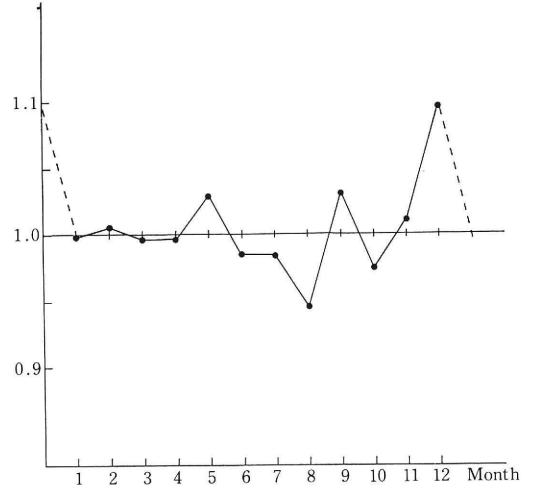


図4. 1日平均外来処方せん枚数の月別変動値

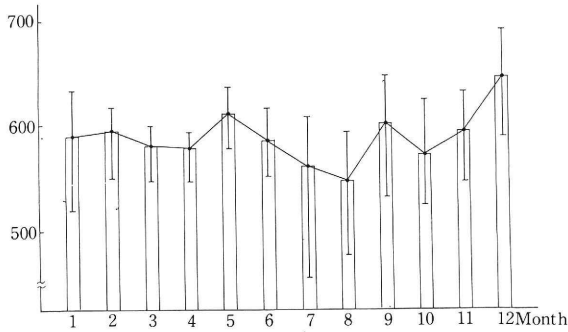


図3. 1日平均外来処方せん枚数変動幅

につき、1ヶ月外来処方せん枚数、1ヶ月外来割合および実働日数で除した1日平均外来処方せん枚数の3項目について行なった。

63ヶ月間を時系列関数として考えると時系列の変動は傾向変動、季節変動、循環変動および不

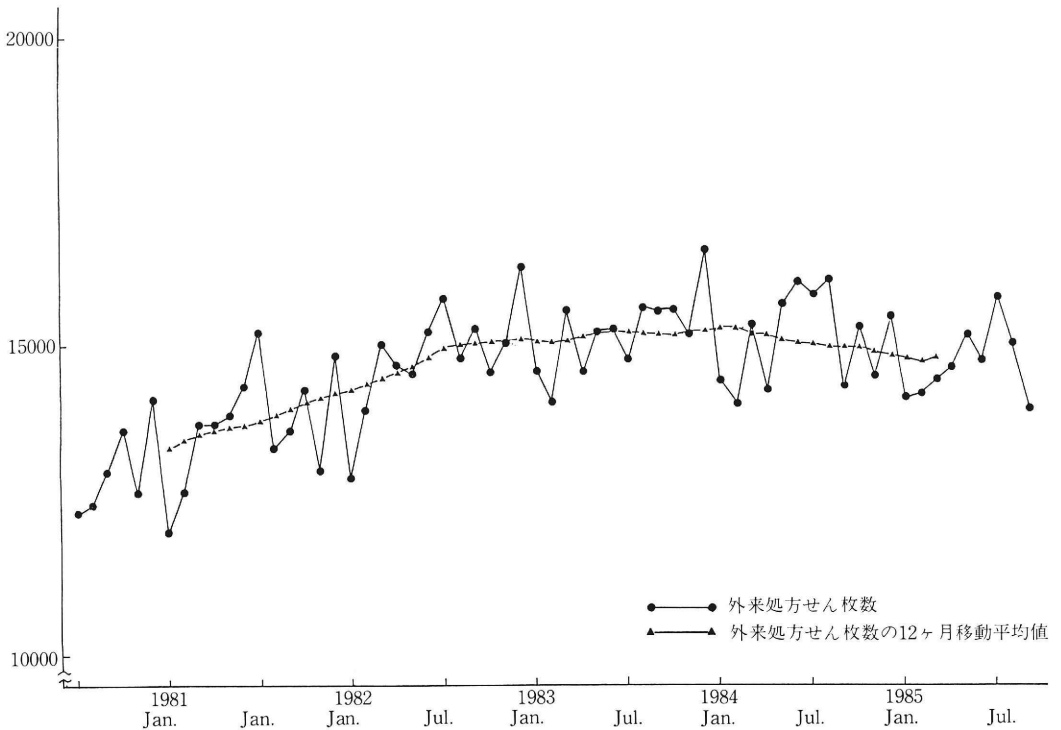


図5. 1ヶ月外来処方せん枚数の推移と12ヶ月移動平均値

規則変動の要素変動に分解することができる<sup>1)~4)</sup>。傾向変動から12ヶ月移動平均値<sup>5)~9)</sup>を求め、季節変動からは対傾向値比率法による月別変動値<sup>5),7),8)</sup>を求めた。

## 結 果

1日平均外来処方せん枚数と12ヶ月移動平均値を図1に示した。期間内の増減の推移を示すといわれている移動平均値は、1982年8月まで漸次増加傾向にあったがその後の伸び率が減少し、

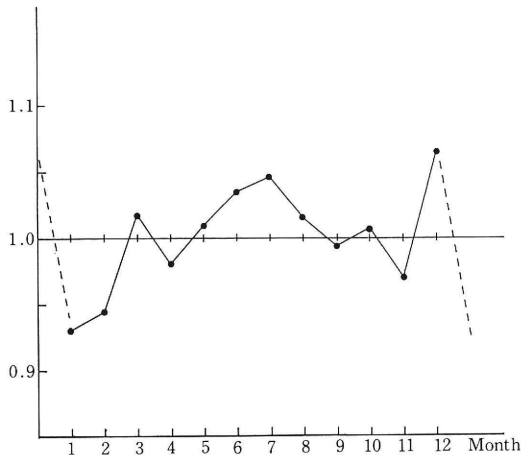


図6. 1ヶ月外来処方せん枚数の月別変動値

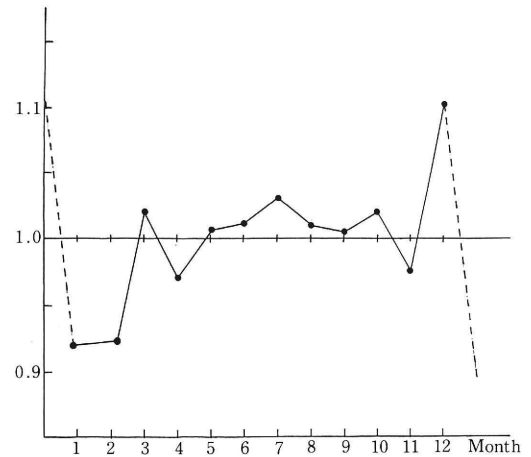


図8. 1ヶ月外来剤数の月別変動値

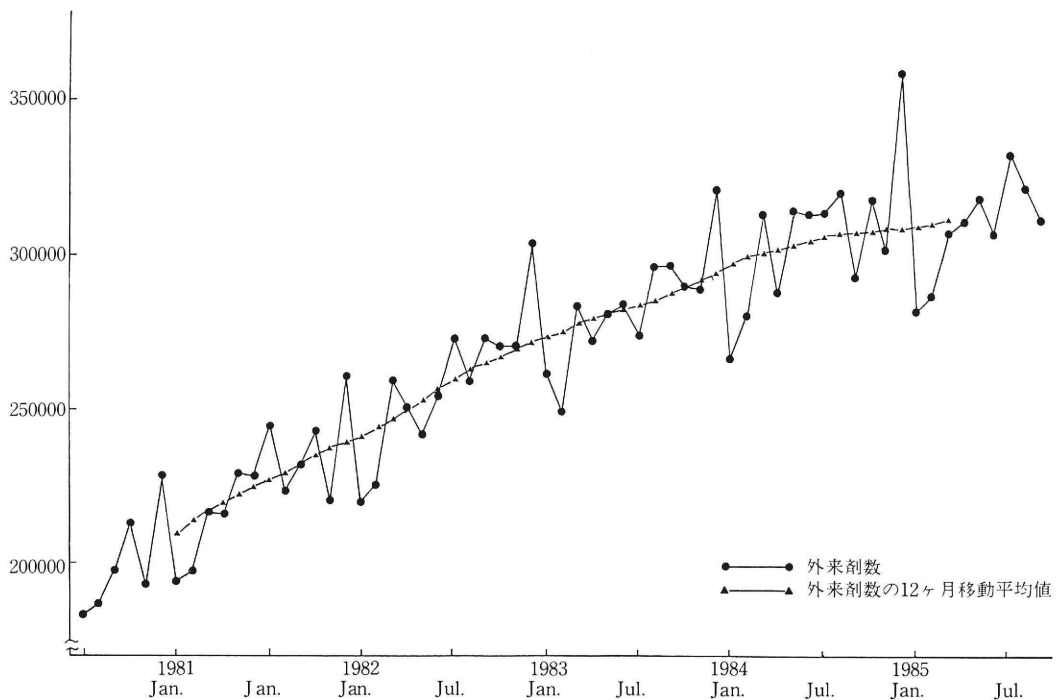


図7. 1ヶ月外来剤数の推移と12ヶ月移動平均値

1984年2月以降下降線を示した。

1日平均外来処方せん枚数の循環変動を図2に示した。ここで表わす循環変動は、傾向変動、季節変動などの系統的変動部分を分解するためのものであり、これにより1983年までは各年ごとにほぼ規則的な変動がみられ、8月に増加、5月、12月にそれぞれ減少を示したが、1984年以降は波形の幅ならびに月別変動の縮小がみられた。

月別1日外来処方せん枚数変動幅(図3)は過去5年間の1日平均外来処方せん枚数の月別平均と変動幅を示し、最少は8月の542枚、最多は12月の647枚で約100枚の差があった。また変動幅は3月、4月が小さく、下半期は比較的大きな変動を示した。しかしこの図3は近年の減少傾向の影響を強く受けているので、このような傾向変動を消去するために月別変動値を求めた。

1日平均外来処方せん枚数の月別変動値を示す図4からは、6月、7月、8月および10月の減少と、5月、9月および12月の増加がみられ、最小値は8月の0.945、最大値は12月の1.097であった。

1ヶ月外来処方せん枚数の推移と移動平均値を示した図5は、1982年8月まで急速な伸びを示したが、その後1984年2月まで伸び率は鈍化し、それ以降はゆるやかな下降線を示した。

1ヶ月外来処方せん枚数の月別変動値を示した図6は、1日平均外来処方せん枚数の月別変動値(図4)と比較すると、1月、2月、4月および11月に減少、3月、6月および7月に増加がみられた。最小値は1月の0.932、最大値は12月の1.067であった。

1ヶ月外来剤数の推移と移動平均値を示した図7は、1ヶ月外来処方せん枚数の移動平均値(図5)と比較すると、異なったカーブを示し、増加傾向がみられた。

1ヶ月外来剤数の月別変動値を示した図8は、1ヶ月外来処方せん枚数の月別変動値(図6)と同様な月別変動値を示し、最大値は12月の1.103であった。

## 考 察

以上の結果より、当院における1日平均処方せん枚数の動向は、1984年3月より30日分投与の大幅な拡大、1984年10月より健康保険本人の1割負担導入の外的要因になんらかの影響をうけ、減少傾向を示した。しかし1983年2月実施の老人保険法(一部自己負担)による影響はみられなかった。

月別データの外来処方せん枚数の移動平均値は1982年7月まで横軸に対して正の勾配を示し、その後平行状態となり、1984年2月から負の勾配を示しているが、外来剤数はこれとは異なり、漸次増加を示し、1枚の処方せんにかかる業務量の増加を意味している。

月別変動では、1日平均外来処方せん枚数のピークは5月、9月および12月で、1ヶ月外来処方せん枚数、1ヶ月外来剤数のピークは3月、7月、10月および12月と双方のピークが異なった。このことは実働日数に関連する歴日変動に強く影響されているためと考えられる。

## 文 献

- 1) 溝口敏行, 野島教之: 経済統計, 72-77, 東洋経済新報社, 東京, 1982.
- 2) 竹内 清: 需要予測入門, 16-18, 丸善, 東京, 1984.
- 3) 岩田暁一, 木下宗七: テキストブック統計学, 248-250, 有斐閣ブックス, 東京, 1985.
- 4) 中村隆英, 新家健精, 美添泰人他: 経済統計入門, 22-25, 東京大学出版会, 東京, 1985.
- 5) 斎藤 弥, 宮家 淳, 岩崎由雄: 処方せんよりみた月別業務量の統計的考察, 病院薬学, 2, 232, 1977.
- 6) 斎藤 弥, 宮家 淳, 岩崎由雄: 外来患者数と調剤業務量との統計的考察, 病院薬学, 3, 234, 1978.
- 7) 竹内 清: 需要予測入門, 53-78, 丸善, 東京, 1984.
- 8) 森田優三: 新統計概論, 104-133, 日本評論社, 東京, 1985.
- 9) 中村隆英, 新家健精, 美添泰人他: 経済統計入門, 25-44, 東京大学出版会, 東京, 1985.

(昭和61年10月21日 受理)